

群 教 セ	F09 - 01
	平17.231集

生徒指導委員会を中核とした 学校カウンセリング体制の構築を目指して

—— 「ピースメソッド」の手法を取り入れて ——

特別研修員 根岸 浩文 (沼田市立沼田西中学校)

《 研究の概要 》

本研究は、ピースメソッドの流れに沿って、生徒指導委員会が中核となり、学校カウンセリング体制を構築していくことを目指したものである。各学級・学年の実態を教師の観察からだけでなく「学級の雰囲気把握する質問紙」調査結果から客観的に把握し、職員間で有効な支援の方法を共通理解しながら組織的、計画的な学校カウンセリングを実践、評価することで、生徒及び教師の変容を図ろうとするものである。

キーワード 【教育相談 生徒指導委員会 ピースメソッド 学校カウンセリング】

I 主題設定の理由

本校は生徒数200名、普通学級6学級（各学年とも2学級ずつ）、特別支援学級1学級の小規模校である。学校教育目標を受け、生徒指導目標を「自己の目標を適切に選択し、計画を立て、ねばり強く実行できる生徒を育てる」こととし、生徒指導委員会を中核として学校カウンセリング（ここでは、学校カウンセリングを予防・開発的教育相談、治療的教育相談など、学校における教育目標を達成するための教育活動の一つととらえ、生徒指導と同じ定義をもつものとする。）を推進している。生徒指導委員会は校長、教頭、教務、生徒指導主事、各学年生徒指導担当、養護教諭、スクールカウンセラー（以下SCとする）で構成されている。そこでは、学年、学級及び部活動や各教科などの学校生活全般の様子について、相談、調整などを実施し、対象生徒に対する支援の方向性及びその修正を行い、組織的、計画的な学校カウンセリングの充実に努めている。

このような学校カウンセリング体制のもと、本年度不登校生徒は四月段階ではおらず、教師の観察からは、全員が明るく元気に登校しているように見受けられる。しかし、昨年度不登校であった2年男子生徒一名、保健室登校をしていた2年女子生徒一名がいたり、友達関係のトラブルから保健室に頻繁に来室したりする生徒は各学年とも数名いる実態がある。また、生徒同士の人間関係や悩みなどの実態については教師の観察やチャンス相談を中心に把握することが多く、生徒の実態が

正確に把握されているとは言えないのが現状である。そのため生徒指導委員会においても悩みを抱える生徒への治療的教育相談を中心とする指導・援助についての検討が中心であった。

そこで本研究では、学校で発生する人間関係に関する諸問題について、対症療法的に解決を図るのではなく、学校の体質改善によって様々な問題行動の未然防止を図るためのプログラムであるピースメソッドの手法を取り入れる。その手法を生かしながら、生徒指導委員会が中核となって組織的、計画的な学校カウンセリングを推進していく。そうすることで、よりよい人間関係をつくり、学校生活に満足感をもたせられるような学校カウンセリング体制の構築を目指し、本主題を設定した。

II 研究のねらい

ピースメソッドの手法を取り入れ、生徒指導委員会を中核とする学校カウンセリング体制を構築する。

III 研究の見通し

1 群馬県総合教育センターで開発された不登校問題課題解決支援資料「学級の雰囲気把握する質問紙」（以下、「雰囲気把握する質問紙」とする）による実態調査を年度始めに実施すれば、学校、学年、学級の課題が客観的に把握できるであろう。

2 SCによる教職員に対するカウンセリングプログラム講習会を実施することにより、担任は学級に必要なカウンセリングプログラムを実践できるであろう。

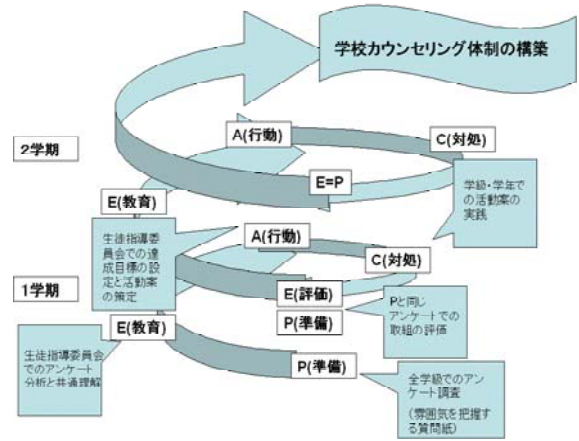
3 実態調査をもとに、生徒指導委員会において、それぞれの集団を向上させるにはどのようなカウンセリングプログラムがふさわしいかを検討した上で、各学級において適切なカウンセリングプログラムを実践し、その結果を職員間で共有し合えば集団が向上するであろう。

4 年度始めに行った「雰囲気把握する質問紙」と同じものを2学期に実施し、評価を行えばこれまでの取組についての成果や今後の支援事項が明確になるだろう。

5 第2回目の調査をもとに、生徒指導委員会において、それぞれの集団を向上させるにはどのようなカウンセリングプログラムがふさわしいかを検討する。その上で、各学級において重点を絞った適切なカウンセリングプログラムを実践し、職員間で共有し合えばより一層集団が向上するであろう。さらに評価として「雰囲気把握する質問紙」を実施すれば、生徒や教師の変容及び本校の学校カウンセリング体制の構築が検証できるであろう。

tion行動)の部分を生徒指導委員会で検討し、各学級、学年の課題を共有し合うことで、組織的、計画的な学校カウンセリング体制を構築していこうと考えた。(図1参照)

図1 ピースメソッドの手法を取り入れた研究の流れ



(2) カウンセリングプログラム

本研究では、A(行動)の段階で共通理解された達成目標と活動案をカウンセリングプログラムとして実施する。具体的には、C(対処)の段階で行うソーシャルスキルトレーニング(以下SSTとする)や自然な自己開示や自他理解、共感的な人間関係づくりを目指す構成的グループ・エンカウンター(以下SGEとする)、さらには生活ノートや学級通信、その他学校生活における指導、支援活動をまとめてカウンセリングプログラムと呼ぶこととし実践を行う。

IV 研究の内容と実践

1 基本的な考え方

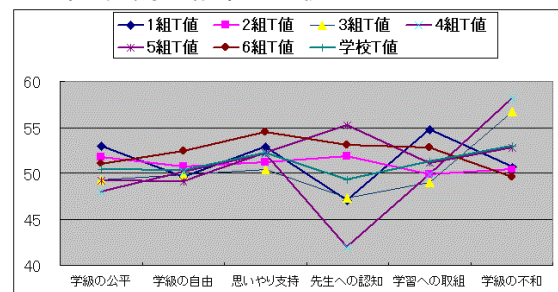
(1) ピースメソッド

ピースメソッドは、オーストラリアの「いじめ防止プログラム」であるピース・パックを参考に開発されたプログラムである。ピースメソッドの基本的なねらいは、学校で発生する諸問題について、対症的に解決を図るのではなく、学校の体質改善によって「いじめ」を始めとする様々な問題行動の未然防止を図るところにある。その過程はP.(=preparation準備) E.(=education教育) A.(=action行動) C.(=coping対処) E.(=evaluation評価)という5段階のステップの中で生徒の課題について教職員の共通認識を作りだし、共通の目標設定をし、計画的、継続的に生徒に働きかけていくプログラムである。そこで本校では、E.(=education教育) A.(=ac

2 研究の実践

(1) P(雰囲気把握する質問紙調査実施)

図2 第1回調査結果—全校



「雰囲気把握する質問紙」により、本校全学級集団の雰囲気を調査してみたところ、図2のような学校全体及び各学級の特性が明らかになった。(図中の1組から6組は本校全学級を表す)

(2) E(生徒指導委員会における分析と共通理解)

ア ここでは、生徒指導委員会において学級ごとのアンケート分析を行い、以下の4点についての共通理解を図った。

- 「思いやり、支持」や「学習への取組」のT値が高い学級が多い。
- 「学級の不和」のT値が高く、人間関係が円滑であるとは言えない学級がある。
- 「先生への認知」のT値が低く、教師と生徒の関係がうまくいっているとは言えない学級がある。
- 「学級の公平」「学級の自由」のT値が低く、学級内の人間関係がうまくいっているとは言えない学級がある。

イ SCによるカウンセリングプログラムの職員研修会を実施した。SSTやSGEの実演やシェアリングの大切さを中心としたもので、経験の少ない職員には非常に参考になった。

(3) A(目標及び活動案の策定)

ここでは、Eの段階において共通理解された各学級の課題から、生徒指導委員会において表1の達成目標を策定し、各学級、学年は実態に即したエクササイズをSCとともに実践した。その後、生徒指導委員会でその取組の様子について情報交換を行った。

(4) C(活動案の実践)

表1 各学級における達成目標とエクササイズ

1年 (1組)	学級の自由・先生への認知の改善 SST(見方を変えれば)
1年 (2組)	学級の自由の改善 SST(見方を変えれば)
2年 (3組)	先生への認知・学級の不和の改善 SGE(PR大作戦)
2年 (4組)	先生への認知・学級の不和の改善 SGE(PR大作戦)
3年 (5組)	学級の公平・学級の不和の改善 SGE(PR大作戦)
3年 (6組)	学級の不和の改善 SGE(PR大作戦)

注：()は図2の学級を表す

ここでは、Aの段階で策定された達成目標に向けて、各学級でSST、SGEを実施した。活動後のシェアリングで出された生徒の感想は表2のとおりである。生徒にとってはSSTやSGEは初めての試みだったため、不慣れなところはあったが実践後のシェアリングでは、ほとんどの生徒が楽しみながら活動できた様子が見られ、有効性が伺えた。「つまらない」「やったことが何につながるのか分からない」と感じた生徒がいたことにも留意しながら

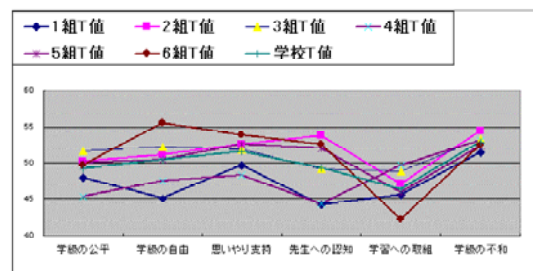
ら今後の活動を継続していくことを生徒指導委員会で確認した。その後、今後も各学級の課題に応じたカウンセリングプログラムの修正及び実践を依頼した。

(5) E(第一回評価)=P(第二回実態調査)

表2 SST・SGE実施後の生徒の感想

第1学年 自分が駄目だと思っていた短所が長所にかえられた。短所か長所にかえられてうれしかった。短所か長所に変わるなんて考えたこともなかった。こういう見方もあることにびっくりしたし、新発見した。いつもより友達とスムーズに話すことができた。
第2学年 自分の長所を言われるとうれしい。みんな良いところがあつてよかった。友達とふれあえて面白かった。自分がどう思われているか分かった。友達の意外な面が発見できた。人の良いところは多くある。疲れた。発表は恥ずかしかったがやってよかった。友達の長所を探すのは難しい。ほめているのか分からない言葉があった。紹介が大変だった。難しかった。よく取り組めなかった。楽しくなかった。もっと楽しくしてほしい。
第3学年 人付き合いは難しいが楽しい活動だった。自分の印象と他者の印象が違った。友達の長所を改めて知った。印象が変わった人がいた。いいところをもっと伸ばしたい。みんな自分のいろいろなことを知っていた。自分がどう思われているか分かった。PR大作戦は恥ずかしかった。またやりたい。2年の時を思い出せた。やったことが何につながるのか分からない。他者の長所を見つけれられて気持ちよかった。ふだんと違うことは難しい。

図3 第2回調査結果一全校



「雰囲気把握する質問紙」により、第2回調査をしてみたところ、図3のような学校全体及び各学級の実態、変容が明らかになった。(図中の1組から6組は本校全学級を表す)

(6) E(生徒指導委員会における分析と共通理解)

生徒指導委員会において、第2回「雰囲気把握する質問紙」調査結果と第1回「雰囲気把握する質問紙」調査結果を比較検討した。担任の取組の状況報告から以下の分析を行い、有効な取組

について校内研修で共通理解した。

ア 学習への取組のT値が全校で5ポイント下がった。詳細を分析すると家庭学習への取組が、どの学級も低下していることが分かった。

イ 1組は学級の不和のT値が女子で減少した。運動会などの学校行事を経験することで互いを認め合うことができたのではないかと考察できる。

ウ 2組は学級の自由、思いやり支持、先生への認知のT値が増加した。この学級では、学校行事や学級活動を行う時、教師から指示するのではなく「どうしようか?どうしたらいいと思う?」などと問いかけ、生徒同士の話し合いをもとにして取り組んだ。お互いの印象やいいところを発見するSGEを取り入れたことで、他者理解が深まった。短学活や日常生活の中で教師の体験や考えを生徒に話した。

エ 3組は学級の公平、学級の自由、思いやり支持、先生への認知のT値が増加し、学級の不和のT値が減少した。この学級では担任が生徒の輪の中に積極的に入り、生徒へ多くの言葉かけを行うとともに、生活ノートをやりとりし、教師と生徒の絆を深めていった。学活や道徳にSGEやピアサポートを取り入れよりよい人間関係づくりに努めた。学級の公平や自由の大切さを折に触れ説いた。

カ 4組は先生への認知のT値が増加し、学級の不和のT値が減少した。この学級では、担任が短学活などで生徒との会話を増やし、生徒が思っていることや考えていることに耳を傾けた。人間関係づくりのためのSGEを何度か行った。学級通信を頻繁に発行し、クラスの団結を呼びかけた。授業におけるグループ活動実施の際にはグループや男女の隔たりがなく活動できるように工夫した。

キ 5組は学級の公平及び男子の思いやり支持のT値が増加した。この学級では担任が折に触れ、中学校卒業後は社会人としての自覚をもつよう進路指導をする中で話してきた。道徳との時間や短学活には他者への配慮の重要性など、集団生活の在り方について重点的に取り組んできた。

ク 6組は学級の自由のT値が増加した。この学級では、学活や道徳の時間に人間関係づくりのSGEを数多く取り入れてきた。中学3年生で高校入試を控えていることから、授業へ

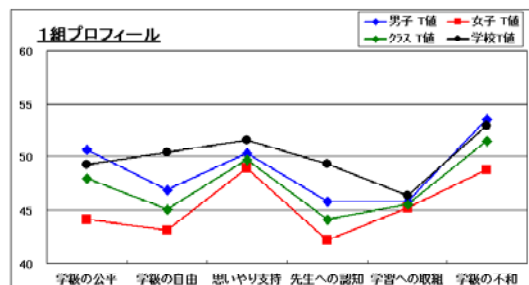
の真剣な取組や課題の提出など、繰り返し指導してきた。

(7) A(目標及び活動案の策定)

Eの段階において共有された有効な取組をもとに、各担任が今後の達成目標及び活動案を策定した。それを生徒指導委員会で検討、修正をしたものを学級ごとに以下に示す。

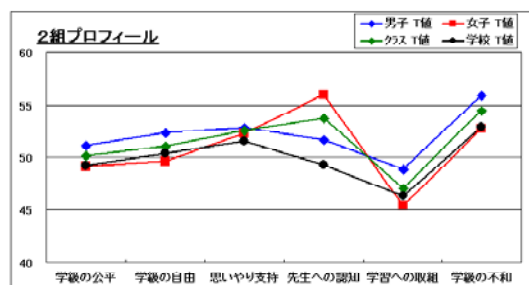
ア 図4から1組は学級の公平、学級の自由、先生への認知、学習への取組、学級の不和を改善していく必要がある。特に男子に比べ女子のT値が低い。日々の指導の充実とともに学活、道徳などにおいて円滑な学校生活について指導していく必要がある。

図4 第2回調査結果－1組



イ 図5から、2組は学習への取組についてのT値が低い。学習計画などの事前学習だけでなく事後の振り返り活動を充実させていく。友達へのからかいや適切でない言葉づかいをする場面をなくしていくために、言葉の違いを体験するロールプレイを行う。自分の意見を発言できる雰囲気が出てきたので、生徒一人一人の考えを生かせるよう、教師が生徒の話に耳を傾けていく。

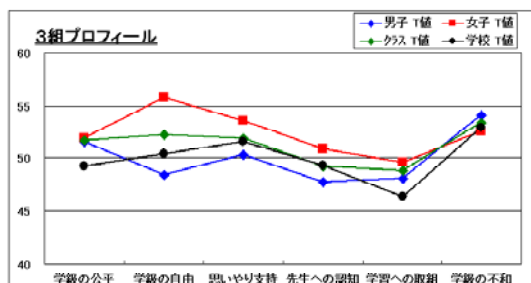
図5 第2回調査結果－2組



ウ 図6から、3組は学習への取組が低い。詳細を分析すると、授業に関する質問項目ではポイントは高いが、家庭学習に関する質問項目でポイントが低下していることが分かつ

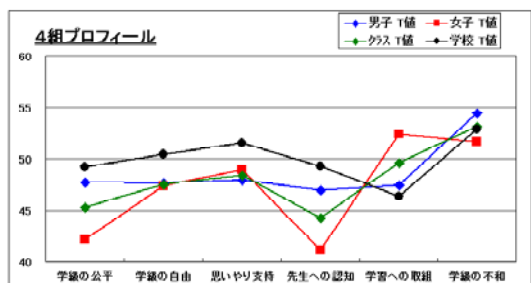
た。そこで、家庭学習の大切さに気付かせるとともに、具体的な家庭学習のやり方を指導する必要がある。さらには三者面談で、家庭でも学習しやすい環境を整えてもらうよう呼びかけていくこととした。

図6 第2回調査結果－3組



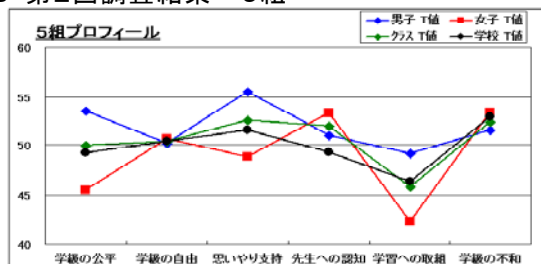
エ 図7から、4組は女子の学級の公平のT値が低い。これは係の仕事や給食、清掃当番などにおいて、わがままを通して生徒がいることが一因であると思われる。男子の中には個人のわがままを許さない雰囲気が生まれ、注意をする生徒も出てきているので、道徳や学活の時間を利用してその雰囲気を女子にも広げていく。

図7 第2回調査結果－4組



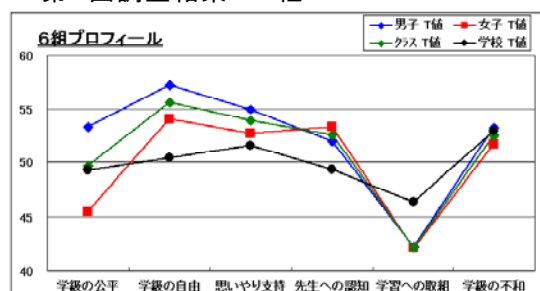
オ 図8から、学級の公平、思いやり支持、学習への取組について、男女差が大きくなってきているのでその差を縮めていくことを目標としたい。道徳や学活の授業を通して、改善を図りたい。

図8 第2回調査結果－5組



カ 図9から、学級の公平についての男女差が大きい。詳細を分析すると、「このクラスはみんな平等です」「このクラスには公平な雰囲気があります」といった質問項目で女子の値が低かったことが分かった。これは女子の中に自分勝手な行動をとりがちな生徒が数名いることが原因していると思われる。また、学習への取組でも、女子の中に授業中の私語が見られる生徒がいることから、すべての質問項目で値が低かった。道徳や学活の授業を工夫し、話し合っていきたい。

図9 第2回調査結果－6組



(8) C(活動案の実践)

Aの段階で策定された達成目標に向けて活動案(カウンセリングプログラム)を各学級で実践した。効果的であったと思われる実践例を以下に示す。

ア 2組

道徳の授業でSGE「私を例えろ」を実施した。友達に自分に似ている図形を選んでもらう活動であった。事後の感想は「自分が考えていなかったものを友達から言われてうれしかった」「みんな違う考えをもっていてうれしかった」「友達のいいところを言い合うことは余りないから良かった」が多かった。学活の授業で、SGE「教室はどこだ」を実施した。授業後の生徒の感想には「自分の話を聞いてもらってうれしい」「みんなで出し合った情報から解決できたのは楽しかった」があった。教師の観察からは、互いを理解し合い、協力することの楽しさを感じ取った様子が伺えた。

イ 3組

運動会前後にSGE「君はどこかでヒーロー」を学活の授業で実施した。「自分のことをみんながほめてくれてうれしかった」という感想が多かった。その他「自分探し」や「気になる自画像」など自己理解や他者理解を深める活動を多く扱っ

た。「自分の意外な一面が分かった」「人からどう見られているのか分かって面白かった」などの感想があった。SGEを何度かやっているうちに教師の観察からも学級の雰囲気が良くなっていくのが分かった。

ウ 4組

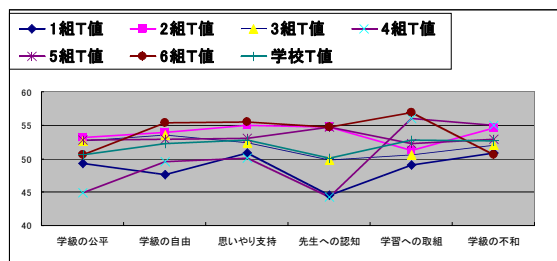
運動会前後と合唱コンクール前後にSGE「君はどこかでヒーロー」を学活の授業で実施した。「全員が全員のために必ず何かをしていることが分かった」「いろいろな人が自分を見ていると思った」などの感想があった。SGEを通して仲間の新たな一面の発見や協力し合うことの大切さを学んだ様子が伺えた。学級通信を頻繁に発行したが、生徒の思いや考えを載せることで、生徒は一人一人の考えを知ることができた様子であった。

エ 6組

学活の授業で、雰囲気を把握する質問紙調査結果の一部を提示し、グループで6組の課題を分析し、改善策を話し合い、シェアリングを行った。「グラフを見て予想通りの結果だった。話し合いではみんな同じようなことを思っていたので安心した。とにかく変えなくてはいけないと思った。自分をしっかりもつこと。授業をしっかり受けること。思いやりをもつて接すること。自分で何が正しくて正しくないかを判断する力を身に付けること。友達の中にはまわりを批判する癖があるので、自分を振り返った方がいい」という感想があった。教師から見て、これまで多くのSGEに取り組んできた成果があらわれた授業であった。

(9) E(第二回評価)

図10 第3回調査結果－全校



第1回、第2回と比較すると各学級とも各項目のT値が向上した。学級の不和のT値を下げるのが今後の全校の課題である。

V 研究のまとめ

本研究は、「ピースメソッド」の手法を取り入れ、生徒指導委員会が中核となり、学校カウンセリング体制を構築していくことをねらいとしたものであった。群馬県総合教育センターで開発された「学級の雰囲気を把握する質問紙」を使い、客観的に生徒の実態を把握することで、各学級における明確な課題が見えてきた。それを生徒指導委員会が中核となり各学級を組織で支援し、課題や解決のための達成目標や活動案を全職員で共有しながら実践してきた。その結果、各学級とも各項目のT値が向上し、(図2、図3、図10参照)職員からも学校カウンセリング体制が構築されてきたという意見が生徒指導委員会で聞かれるようになってきた。本研究を通して明らかになった成果をまとめて結びとする。

- 生徒指導委員会で、「雰囲気を把握する質問紙」調査結果の客観的分析及び共通理解を行うことや、課題に対する目標及び活動案を検討することを通して、効果的なカウンセリングプログラムが職員間で共有できるとともに、支援の手立てが明確になる。課題とそれに対する支援の手立てが明確になると、教師の意識が変容し、課題解決を目指す意欲的な姿が見られるようになる。
- ピースメソッドの手法を取り入れ、その流れに沿って生徒指導委員会を中心に実践を重ねることを通して、円環的に学校カウンセリング体制が構築できる。特に、評価に実態把握で用いた雰囲気を把握する質問紙を利用することで、カウンセリングプログラム実施前と実施後の生徒の変容の様子が一目で分かるとともに、さらなる課題が明確になる。
- 研究を開始した当初は学級の実態が数値データで表されることに対して抵抗を感じたという職員からは、研究を重ねていくうちにその抵抗が意欲に変わっていったという意見が聞かれた。

〈主な参考文献〉

- ・国分 康孝 著 『エンカウンターで学級が変わる中学校編』 図書文化社 (2002)
- ・群馬県総合教育センター 実践ワークブック 不登校問題課題解決支援資料 改訂版 (2005)

(担当指導主事 野村 達之)